

ヨハネによる福音書 13章 21～30節

「最後の晩餐」^{ばんさん}

・ 今月の聖書は、「最後の晩餐」という呼び名で一般の人々にもよく知られている場面です。絵画の世界でも、これまでに多くの画家がこの場面を絵にしてきました。

・ イエス・キリストはこのすぐ^{あと}後に捕らえられ、裁判にかけられ、ついには十字架につけられます。
・ ですが、2,000年前のそのとき、エルサレムの一室でもたれたその晩餐とは 実際にはどんなものだったのでしょうか。

皆はどんな部屋に集まり、どんな配置で、どんなところに座ったのか。その座り方はどんなだったのか。そして、どんな格好として食事をし、どんなふうにして主イエスの言葉を聞いたのか。さらには、その時のやり取りや表情や目の動きは・・・？ 興味は尽きません。

そんなふうにして事のあれこれを細かに考えてみると、よく思わされます。私たちは実は、当時の「現場」の実際を意外と知らないままに聖書を読み進めていることが少なくないのでは、と。

・ けれども、聖書をきちんと理解し、そのメッセージを的確に読み解くうえで、ひょっとして それらの一つひとつに何か大切な^{かぎ}が隠されているとしたら・・・。現場を丁寧になぞって探る そんな探偵もどきの作業も、面倒なだけではなく、きっと楽しくて報いの大きなものになるにちがいありません。

・ ということで、まずは実際の様子がどんなものだったのか、豊かな想像力を働かせて、最後の夜の場面を御一緒に再現してみることにしましょう。

その探偵もどきの大きな助けになるのは、何といても「最後の晩餐」を描いた歴史の名画です。今月は、3枚の名画を見比べながら、その夜の現場に迫ることができればと思います。

画家たちはその場面をどのように描いてきたか・・・

・ 歴史の画家たちはそれぞれに考察を重ね、そこに豊かなイマジネーションを織り交ぜて、数々の名画を生み出してきました。それらの中から、今月は「レオナルド・ダ・ヴィンチ」「ヤコポ・バツサーノ」「ニコラ・プッサン」の3人に注目し、特徴的な3枚の「最後の晩餐」を見てみることにしましょう。

1. 第一は、「レオナルド・ダ・ヴィンチ」の絵です。誰もが知る、最も有名な作品と言えるでしょう。

レオナルド・ダ・ヴィンチ（1452～1519年）は、イタリアのルネサンス期を代表する芸術家です。「最後の晩餐」はミラノにあるサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ修道院の食堂の壁画として制作され、1498年に完成しました。

横長のテーブルと、その向こうに一列になって座る弟子たちとイエス・キリスト。椅子に腰かけて座っているようです。



レオナルド・ダ・ヴィンチ「最後の晩餐」(1498年)

2. 第二は「ヤコポ・バッサーノ」の絵で、ダ・ヴィンチのそれとはかなり違ったものになっています。

ヤコポ・バッサーノ(1510~1592年)もイタリアの画家で、16世紀後半のルネサンス最盛期を代表する巨匠です。「最後の晩餐」は1542年に描かれました。

あまり大きくないテーブルをコの字形に囲んでいます。低くて長いソファのようなものの上に、皆が半ば横たわるようにして席に着いています。



ヤコポ・バッサーノ「最後の晩餐」(1542年)

3. そして最後は、「ニコラ・プッサン」の絵です。

ニコラ・プッサン(1594~1665年)は17世紀バロック期のフランスを代表する画家で、作品

は1640年のものです。

全員が輪になる形で、食事の席をつくっています。皆がほぼ寝そべるようにして、大きな台状のものの上に横たわっています。



ニコラ・プッサン「最後の晩餐」(1640年)

- ・その時の「現場」の様子は正確にどうだったのか。それは実は、間違いなくこうだったと断定できるほどには分かっていません。それなりの推測はなされていますが・・・
- ・いずれにしても、聖書が記すその場の様子をこれらの絵に重ねて思い描いていくと、どうでしょうか。皆の言葉のやり取りやその一挙手一投足はどんなふうだったと思われるでしょうか。また、一人ひとりの表情や心の内は、いったい どんなだったと想像されるでしょうか。
- ・聖書からのメッセージというのは、そのようにして現場の実際が実感されて初めて、よりよく・より深く・よりさやかに聴こえてくるように思われます。そこでいろんなことに気づかされるからです。しかも、それはただ一つでなく、幾つもの語りかけとして、この私たちの心に響いてきます。
- ・3枚のうちのどれが実際の晩餐のその時に近いと思われるでしょうか。
その絵の助けを借りて、今日の聖書の深みからどんな大切なことを読み取り、聴き取るでしょうか。
- ・そのためのヒントとして、今日の箇所から「気になるあれこれ、不思議なあれこれ」を拾い出して、次に書き出してみたいと思います。

聖書には実際、分かりにくいことがたびたび書かれていて、それがまた、大事なメッセージを読み解くかぎともなっています。ですから、何かにつけて「引っ掛かる」ということは聖書を読むうえで決して悪いことではなく、むしろ大切なこととも言えるでしょう。何にも引っ掛からないところからは実は、何か気づくことも 何かを発見することも、何一つ起こらないからです。

気になるあれこれ、不思議なあれこれ

1. イエス・キリストの態度

まず初めに気になるのは、「イエス・キリストの態度」です。

聖書は、「イエスはこう話し終えると、心を騒がせ、断言された」(21)と切り出しています。

しかも、続けて「はつきり言うておく」(21)と、いま一度 念を押すようにして、主イエスの最初の言葉を記しています。

そこにははたして、イエス・キリストのどんな表情があったのでしょうか。主イエスのどんな思いがそこにあつて、どんな意味合いがそこに込められていたのでしょうか。そして、その場の空気はどんなものになつていったか・・・

2. 出来事の深刻さ

次に気にかかるのは、「出来事の深刻さ」です。

なぜならば、イエス・キリストがこう口にされるからです。「あなたがたの一人がこの私を裏切ろうとしている」(21)

御自身のすべてを注ぎ出して、誠心誠意 関わってこられた弟子たちです。そのうちの一人が今、自分を裏切ろうとしているというのです。これ以上深刻なことはないはずですが、どうしてそんなことになつたのでしょうか。

主イエスの面持ちに険しさが増したことでしょう。となれば、弟子たちは事の重大さに気づき、さらには当然、先生が何のことをおっしゃっているのか知っている者もある程度いたと、普通はそう思うのではないのでしょうか。しかし、そう思いきや・・・

3. 弟子たちの理解度

「弟子たちの理解度」はいったい、どんなものだったのか。それが、次に疑問に感じられる点です。実際、弟子たちはイエス・キリストに対して、なんとも理解しがたい不思議な態度を示しています。「だれについて言うておられるのか察しかねて」(22)とか、「座に着いていた者はだれも、なぜユダにこう言われたのか分からなかつた」(28)とかいうのです。

これはいったい、どういうことなのでしょう。誰一人、ユダに疑いらしいものを抱いていないようにみえます。なぜ、そうなのか。不思議といえば、なんと不思議なことなのでしょう。

4. 容疑者探しの様子

ならば、「容疑者探しの様子」はどうでしょうか。一コマひとコマを具体的に想い描けるでしょうか。

聖書はその様子を次のように書き留めています。

「イエスのすぐ隣には・・・イエスの愛しておられた者が・・・席に着いていた」(23)

「シモン・ペトロはこの弟子に・・・と尋ねるように合図した」(24)

「その弟子が、イエスの胸もとに寄りかかったまま、『主よ、それはだれのことですか』と言うと」(25)

「イエスは『わたしがパン切れを^{ひた}浸して与えるのがその人だ』と答えられた」(26)

5. 裏切りの実行

そしてついに、「裏切りの実行」へと事態は進んでいきます。

「パン切れを浸して取り・・・ユダにお与えになった」(26)

「ユダはパン切れを受け取ると、すぐ出て行った」(30)

6. まだまだ不思議なことが

こうして、最後の晩餐は裏切りの晩餐へと変わっていったのでした。

ですが、それにしても、不思議は尽きません。上に記したあれこれのほかに、「まだまだ不思議なことが」幾つかあります。目につくままにそれらを書き出すと、以下のとおりです。

・そもそも、イエス・キリストがもしもそこにいる全員に対して「パン切れを与える人がこの自分を裏切る」と言われたとしたなら、またそのように教えてから「ユダにパン切れをお与えになった」としたなら、その一部始終を聞いて見ていた弟子たちからどうして次のような言葉が出るのか。「なぜユダに『しようとしていることをしなさい』と言われたのか、^{かいもく}皆目見当がつかなかった」

・「イエスは、『しようとしていることを、今すぐ、しなさい』と彼〔ユダ〕に言われた」(27)とあるが、主イエスはどうして、このような冷たく聞こえる言葉をユダに発せられたのか。

・弟子たちは最後までイエス・キリストの言葉が理解できず、次のように思った者もいたという。「ユダが金入れを預かっていたので、『祭りに必要なものを買いなさい』とか、貧しい人に何か施すようにと、イエスが言われたのだと思っていた」(29)。これはいったい、どういうことなのか。

7. 意味深な描写

そして最後に、聖書はなんとも「意味深な描写」を添えて、今日の場面を閉じています。「夜であつた」(30)という一言です。

この一言から、私たちはどんな連想を^{ふく}膨らませますでしょうか。最後の晩餐の出来事について、裏切りのユダについて、弟子たちについて、そして自分自身について、イエス・キリストについて・・・。それぞれについて、何かしら本質的で重要な事柄が連想されるでしょうか。

8. そして結局、ユダはどこに行ったのか・・・

終わりにもう一つ 気になることを加えるとすれば、それは「そして結局、ユダはどこに行ったのか・・・」ということではないでしょうか。イエス・キリストを裏切る者となったユダははたして、最後はどこに行ったのか。いわゆる「地獄」と呼ばれる、そのようなところに落とされたのか。それとも・・・？ 疑問と関心は尽きません。

[参考]

「イスカリオテのシモンの子ユダ」(26)

・「イスカリオテ」とは「ケリオテ出身の男」の意で、つまりユダは「ケリオテ出身の男であるシモンの子のユダ」ということになります。

*このケリオテは、ユダのケリヨト (ヨシュア 15:25) かモアブのケリヨト (エレミヤ 48:24)

と考えられています。

* * *

今月は探偵もどきの学びになりましたが、こうした学び方も時にはおもしろく、聖書を実感をもって深く読み解くうえでとても有意義な方法ではないでしょうか。

以上の学びをヒントにして、今月の聖書から大切なメッセージを幾つも読み取ることができたらと思います。

皆さんはそれぞれ、どんな語りかけを聴き取られたでしょうか。